世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群公開講座

第７回　「ヤマト王権と沖ノ島」

本講座は「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の世界的な価値を明らかにするために行われた調査研究成果を、最新の知見と合わせて広くお伝えすることを目指しています。
今回は考古学の立場から古墳時代の宗像地域を検討し、ヤマト王権および宗像地域を支配した古代豪族宗像氏が沖ノ島祭祀にどう関わったのか、考えます。

日　時：令和元年 12 月 7 日（土）13:30-16:30

場　所：カメリアホール大研修室

スケジュール：

13:30 開会あいさつ

13:40 講演 1「「ヤマト王権と沖ノ島祭祀」
白石 太一郎（しらいし　たいちろう）先生

15:00 休憩(15 分)

15:15 講演2「宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀」
重藤 輝行（しげふじ　てるゆき）先生

16:30 閉会

世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺跡群 公開講座 2019.12.7

ヤマト王権と沖ノ島祭祀

白石太一郎

沖ノ島における古代祭祀は、九州の一地方勢力によって執行されたものではなく、畿内の「ヤマト王権」による国家的な性格のものであったことは、奉献品の豪華さなどから、早くから指摘されてきたところである。その結論は今も変わらないが、ただその後約半世紀間の考古学的な古墳時代研究の進展の結果、沖ノ島祭祀開始の契機などに関する見解は、大きく修正が迫られている。最近の研究成果を踏まえてこの課題について考えてみたい。

従来の「4世紀中葉以降、鉄資源を求めて朝鮮半島南部に進出したヤマト王権が宗像の勢力によってなされていた沖ノ島祭祀に関与するようになった」とする井上光貞氏の説(井上「古代沖ノ島の祭祀」『東大三十余年』1978年)に代表されるような見解は、最早成立し難い。沖ノ島の祭祀遺跡で最も遡る17号遺跡に供献されている銅鏡群に含まれる倣製三角縁獣文帯三神三獣鏡(20号鏡)などは、最近の福永伸哉氏による倣製三角縁神獣鏡の編年ではその第Ⅴ段階に位置づけられ、4世紀の第4半期に降るものとされる(福永『三角縁神獣鏡の研究』2005年)。沖ノ島祭祀の始まりは4世紀後半とされてきたが、それも4世紀末葉に近いものであることは疑いないのである。

4世紀末葉は、畿内王権内部でもその中核が大和の勢力から河内の勢力に移った大変革の時期である。それは高句麗の南下に対応するため百済が倭国に誼を求め、倭国もこの東アジアの国際情勢の荒波に巻き込まれた結果にほかならない。新しい河内政権は、積極的に百済やその影響下にあった伽耶諸国との直接的な交渉・交易に乗り出すのである。それこそがヤマト王権による沖ノ島祭祀開始の契機にほかならない。

はじめに
1．沖ノ島祭祀の開始時期
2．4世紀末葉におけるヤマト王権の変容
3．4世紀後半の東アジア情勢と沖ノ島祭祀
4．沖ノ島祭祀における宗像勢力の役割
まとめ

〔沖ノ島祭祀とヤマト王権の関わりに関する既往の学説〕

① 鏡山　猛氏（「結語」『沖ノ島』宗像大社復興期成会、1958年）

「ひるがえって史書をひもとく時、古墳時代の後期といわれる時代には新羅との対立抗争の記事が多いことに気がつくのである。この歴史的な抗争に即して沖ノ島の遺物を考えるならば、新羅での戦利品或は戦勝祈願といった端的な考えもうかぶのであるが、このような解釈には吟味を要する。吾々はむしろこの対新羅との国際関係の緊張したなかに、記録にはあらわれない文化交渉の一面を求めたいのである。（中略）それは半島の一国に限られた関係ではないけれども、広く西方の文物が伝播する経路を考える上に新羅の立場は微妙に影響してくる。ガラス容器は不幸にして小残片止まっているが、これも西方とつながる遺物として新羅古墳の発見遺物は貴重なかけ橋である。」

「時代は降るけれども、三彩陶片も舶載品とすれば特筆すべき事柄である。これらの遺物は、我が国の古墳墓にも稀にみる所であり、沖ノ島の豊富な祭祀品からみれば、それが北九州という特殊な環境によって得られた特権でなく、祭祀の性格が国家的な色彩を帯びていることが推測されるであろう。」

② 原田大六氏（「十七号遺跡」『続沖ノ島』宗像大社復興期成会、1961年）

「（前略）ではこの奉納は誰が行ったのであろうか。（中略）これはある特定の場所から一括して奉納されたものであろう。それでは鏡21面その他を一括奉納したのを九州の一豪族として見た場合はどうなるであろうか。弥生文化ならいざ知らず、古墳文化前期にかけて、鏡21面を副葬した古墳は九州では1基も知られていない。豊前石塚山の14面が最高である。（中略）これだけの品物が奉納できるのは、畿内大和朝廷以外にないと考えられる。」

③ 鏡山　猛氏（「結び」『続沖ノ島』宗像大社復興期成会、1961年）

「当宗像神の祭祀が地方的独立勢力のみを背景として成立したものではなく、大和朝廷の国家神として成立したことがうかがえる。」

④ 岡崎　敬氏「総括編」『宗像沖ノ島』宗像大社復興期成会、1979年）

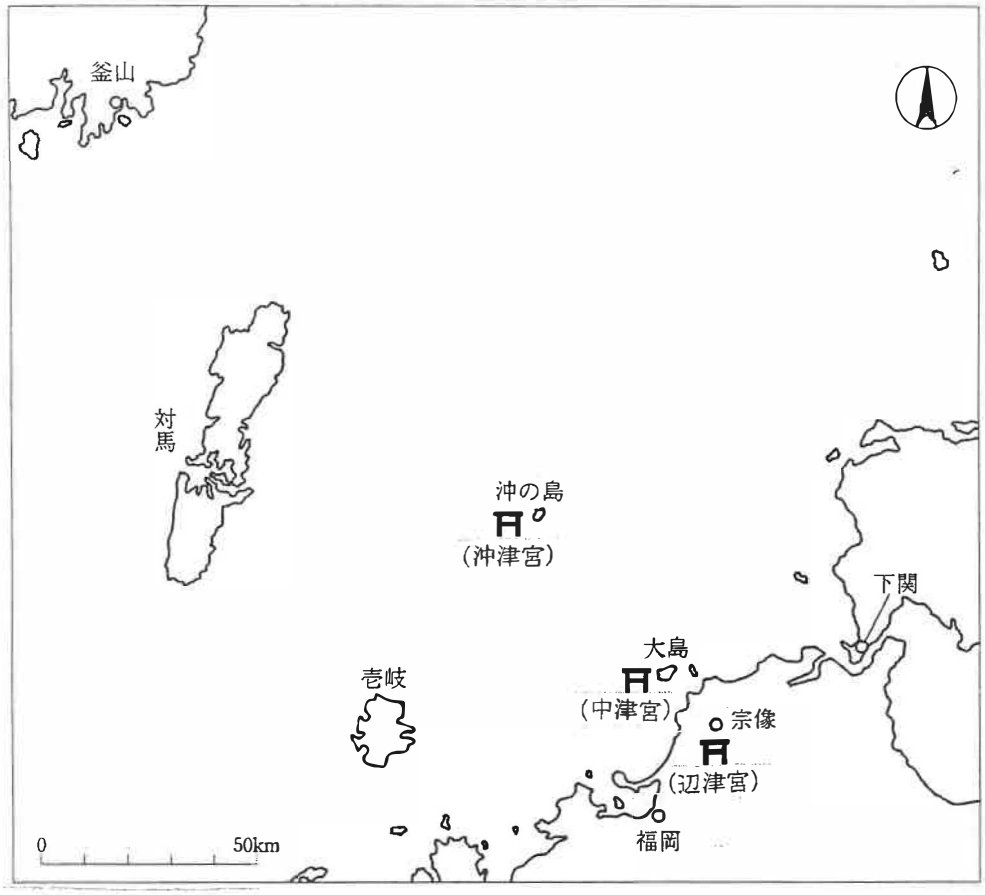
沖ノ島祭祀は、古墳時代前期でも新しい段階の4世紀後半から始まる。4世紀における日本の対外交渉の歴史をあとづけると、それが百済などとの海外交渉を契機に始まったことが知られる。4世紀後半、百済との密接な交渉を始めた大和政権が、宗像の漁民やその豪族「胸形君」の協力を必要としたところから、「筑紫の胸形君等が祭る神」であった宗像神を、大和政権が新しい祭儀と奉献品をもって祀るようになったものとされる。

さらに、沖ノ島祭祀遺跡で最も新しい1号遺跡が9世紀の後半ないし10世紀初頭をもって終焉を迎えることから、国家的規模で行われた遣唐使の廃止もまた沖ノ島における国家的祭祀の終焉の一つの理由と考えうることを指摘される。

⑤ 井上光貞氏（「古代沖の島の祭祀」『東大三十余年』私家版、1978年）

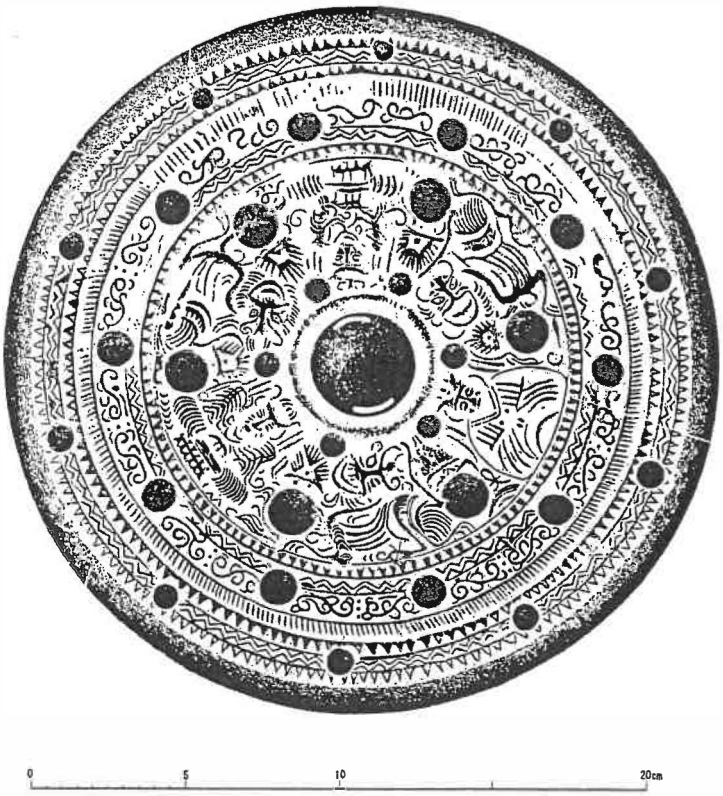
「大和王権はおそくも4世紀初頭には、北九州をもその勢力下におさえ、中葉からは鉄資源を求めて、南鮮にその勢力を伸ばしたのである。またそのことの文化的表現が古墳文化であって、古墳文化は4世紀初頭には畿内におこり、4世紀を通じてしだいに深く九州に及んでいくのである。しかしこの大和王権の勢力の九州への浸透、また南鮮への発展という事態こそ、第一義的には筑紫の地方豪族の祭祀であった宗像祭儀に、大和王権が関与していく真の歴史的背景であったのではないだろうか。大和王権が北九州を足場として南鮮へ進出し始めると。当然ここに、日韓航路安全の問題が大きな課題となってくるのである。そこに、これまでになかった大和王権の参与が考古学的に立証されることの意味が発見されるのである。」

《玄界灘における沖ノ島の位置》



沖ノ島の位置

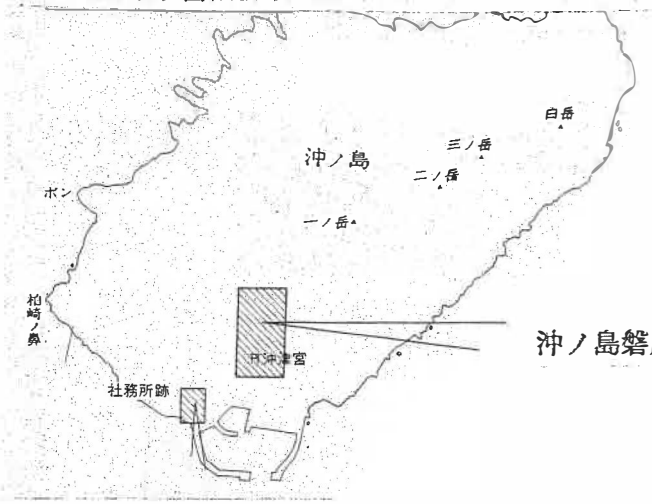
沖ノ島 17 号遺跡の三角縁神獣鏡



三角縁唐草文帯三神三獣鏡（18 号鏡）

三角縁獣文帯三神三獣鏡（20 号鏡）

《沖ノ島磐座群における祭祀遺跡の分布》



沖ノ島磐座群（祭祀遺跡群）の位置

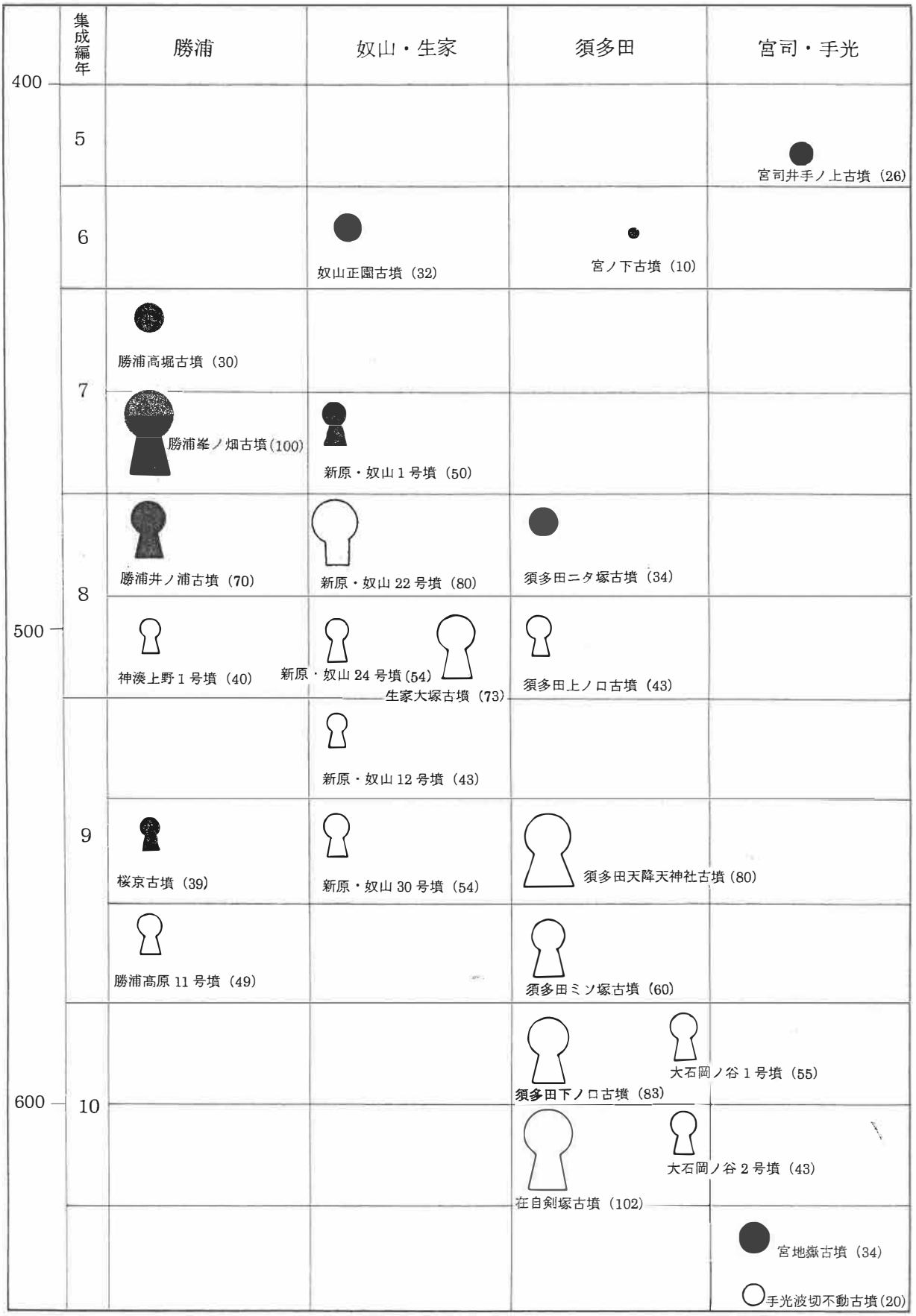
沖ノ島祭祀遺跡の分布

《津屋崎古墳群の分布》

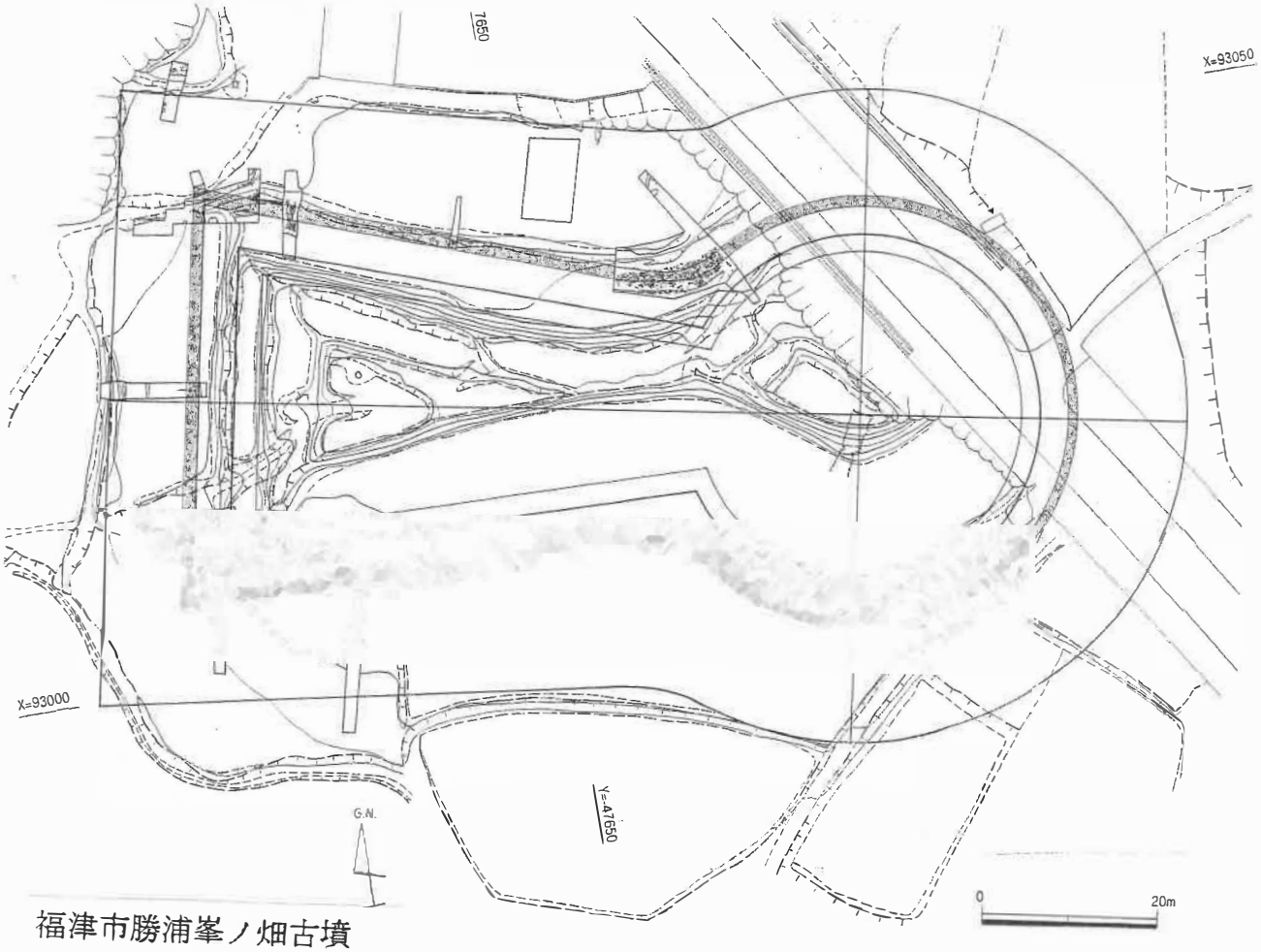
第４図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

津屋崎古墳群古墳分布図

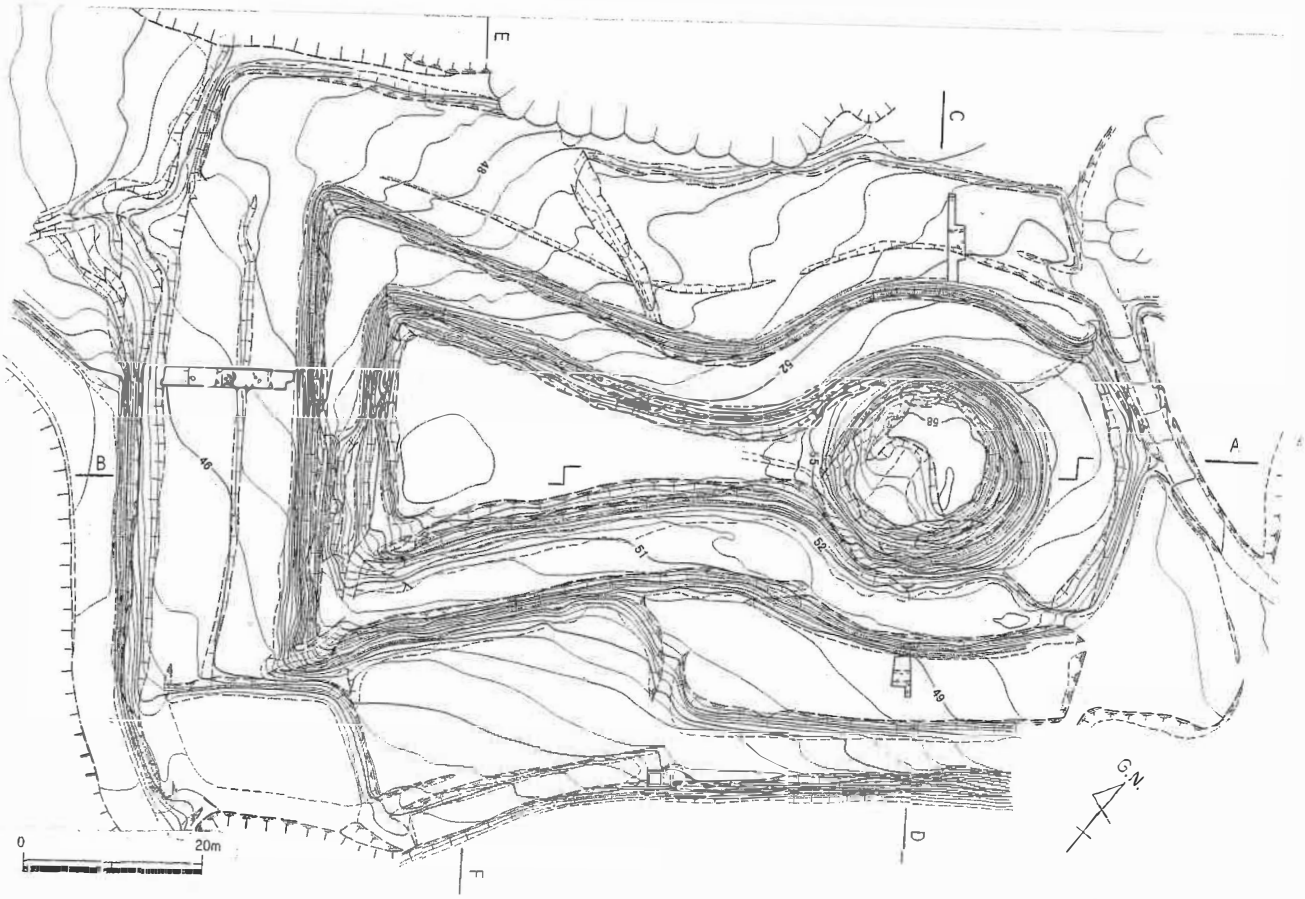
《津屋崎古墳群の主要古墳とその年代》



津屋崎古墳群主要古墳編年図（池ノ上　宏氏による）

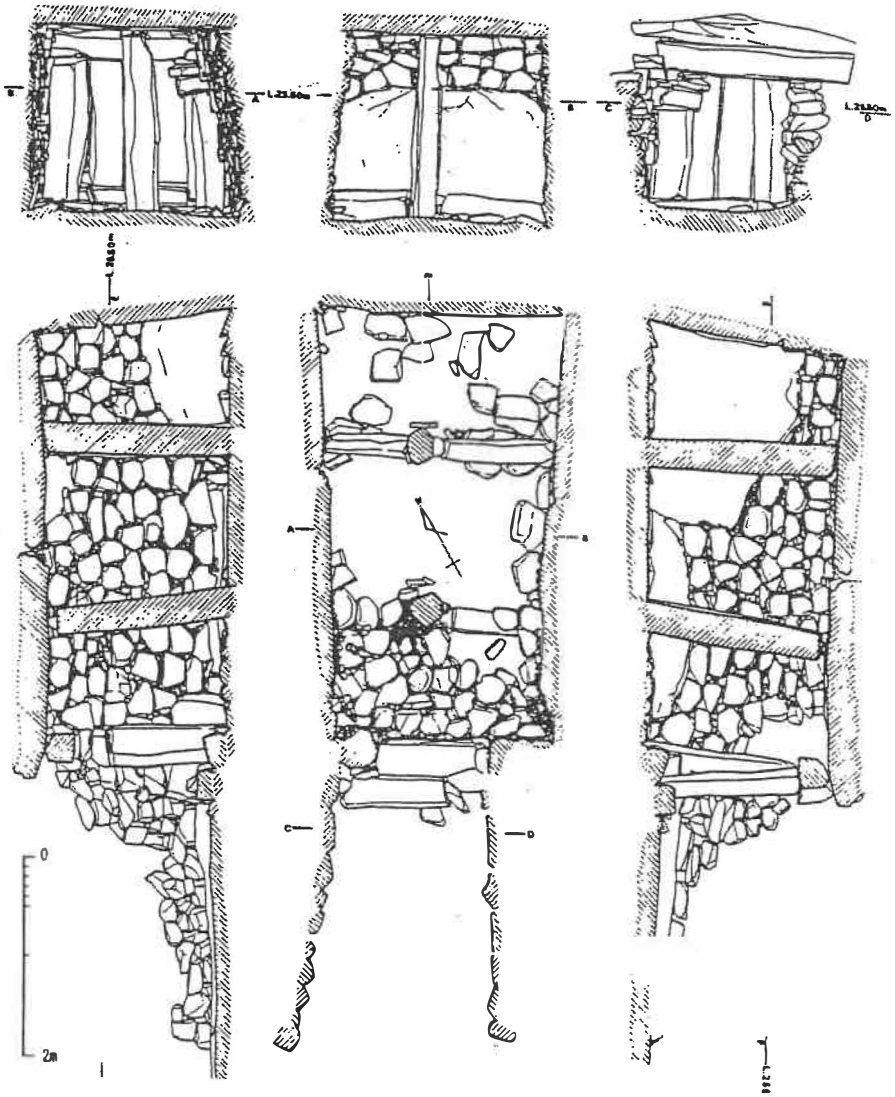


福津市勝浦峯ノ畑古墳

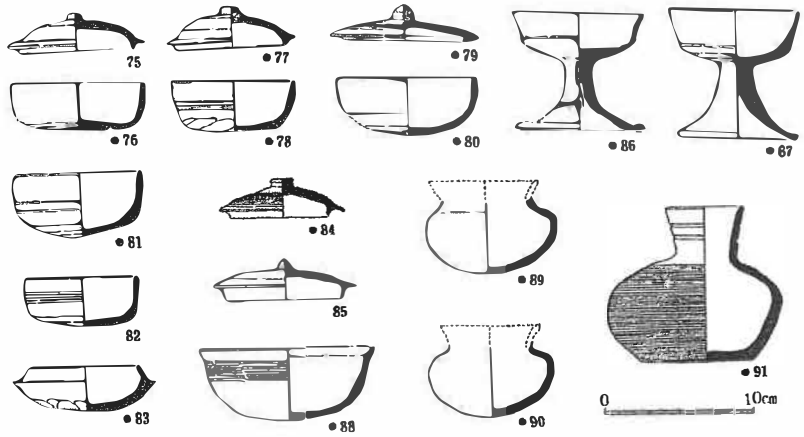


福津市在自剣塚古墳

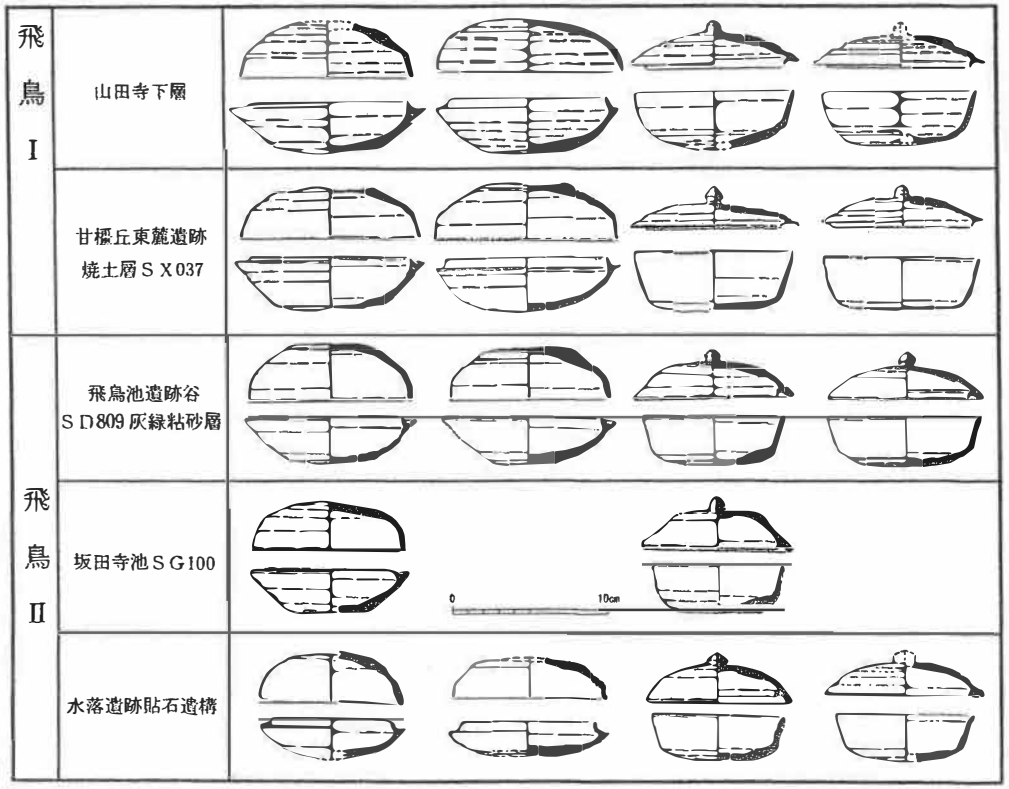
勝浦井ノ浦古墳（旧称津屋崎 10 号墳、勝浦 12 号墳）



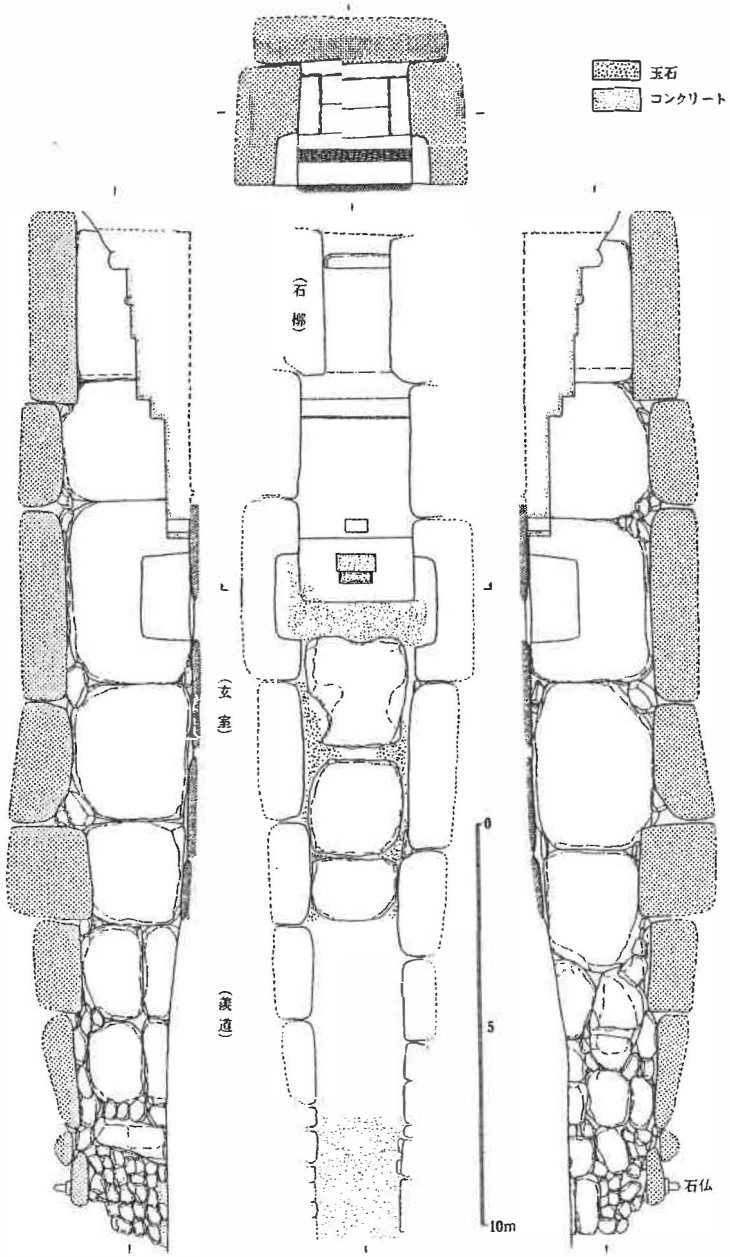
勝浦峯ノ畑古墳（旧称津屋崎 41 号墳、勝浦 14 号墳）の横穴式石室



宮地嶽古墳出土の須恵器（花田勝広氏による）



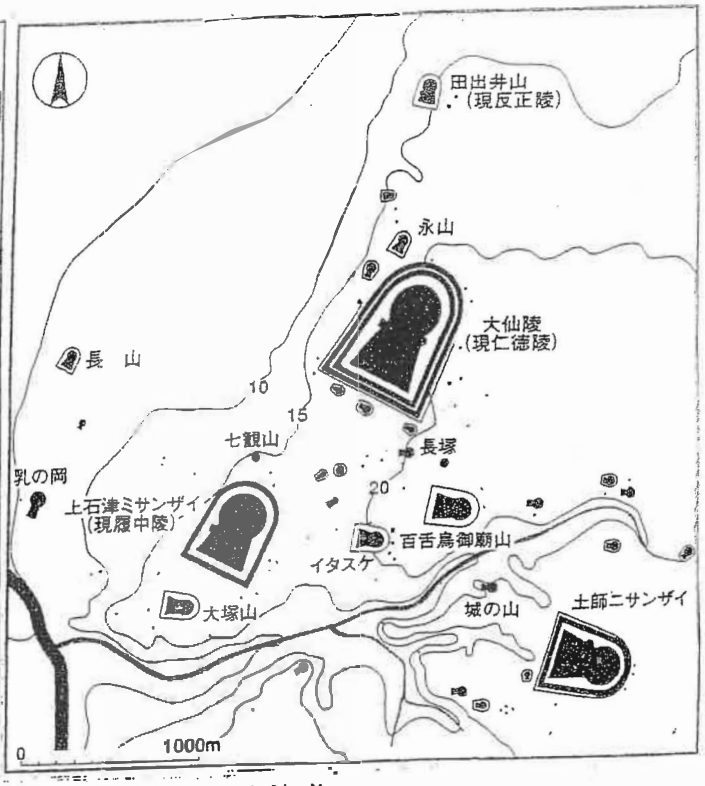
飛鳥Ⅰ期末～飛鳥Ⅱ期の須恵器杯類の編年



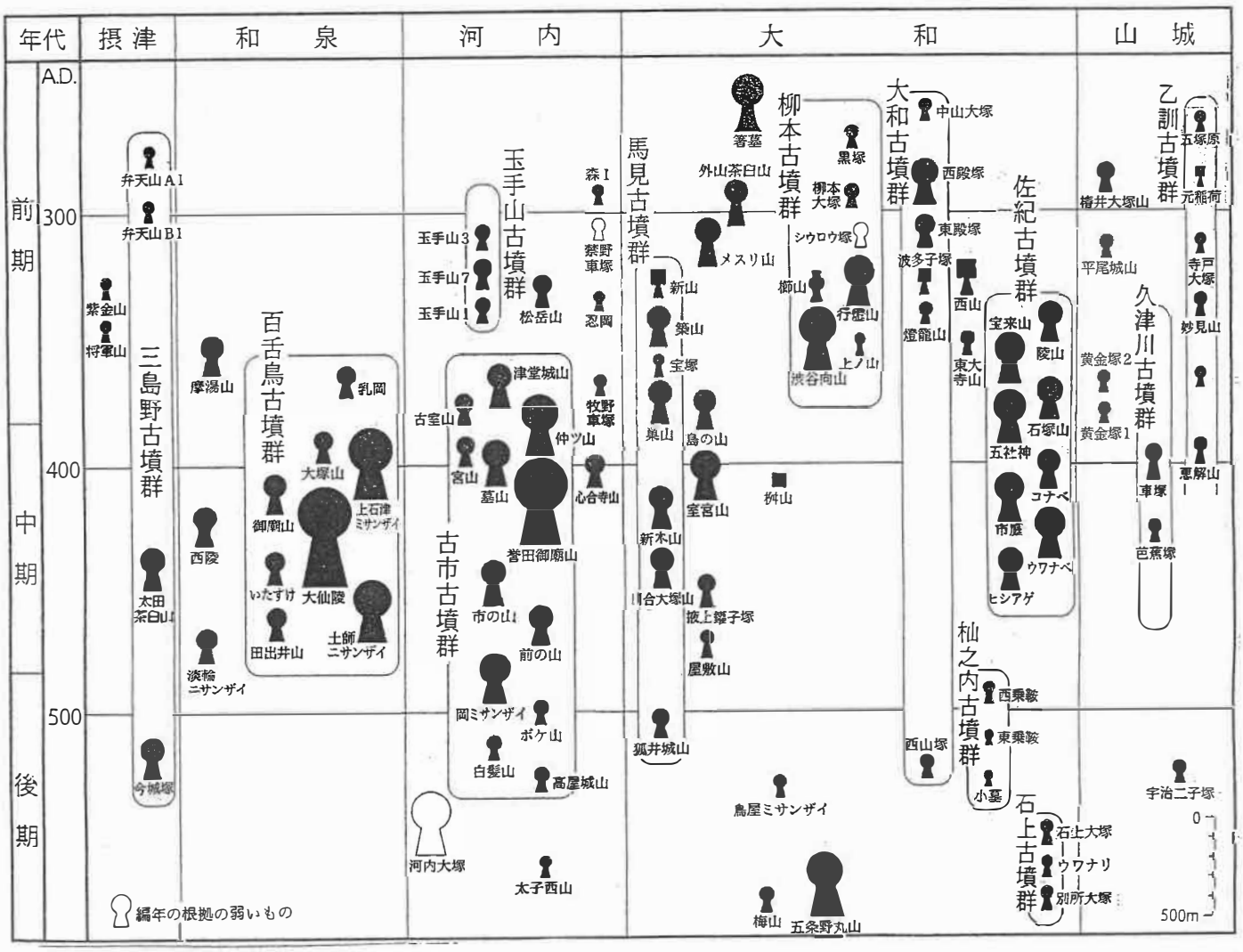
宮地嶽古墳の横穴式石室（花田勝広氏による）

《畿内における大型古墳の動向》

羽曳野市・藤井寺 市古市古墳群



堺市 百舌鳥古墳群



畿内における大型古墳の編年